

「アートは人間の言葉の領域とは必ずしも重ならない」

と、豊島美術館の記者会見で作者の内藤礼さんが話す、この「母型」という作品、実際に観るというか体験してみると、人間の言葉の領域の対極にある、というのが実感です。

内藤礼さんの制作のテーマは「地上に存在することは、それ自体、祝福であるのか」なのだと。いう。すごくよくわかる。

祝福を、問うている。問われると同時に祝福される、というような作品体験。

先週末、四国リトリートに香川を訪ねた翌日に、船に乗って豊島(てしま)へ。この辺りは2010年から瀬戸内国際芸術祭が三年ごとに開催されるようになった関係で美術館や美術作品が点在しているんだそうです。

豊島(てしま)美術館、このドーム型の不思議な建造物以外に作品はない。内藤礼さんの作品「母型」のための美術館、これが凄い。ちょっと驚きました。見てるだけで作り手の頭のお喋りが聞こえてくるようなものはたくさんあるけど、これはその対極にあるような作品でした。

思考じゃない何かにアクセスして、あるいはアクセスするために作るのはまあよくあるけど(それでも天才だけど)、内藤礼さんはちょっと違って、もっと凄いというか神聖を感じるというか、ネガティブを感じないというか、鑑賞者にも何かにアクセスさせる意志を感じるというか。

つまり、天才(思考する凡夫ではない天の才で行われること)でも、その作り手や創作物に苦しみは感じるもので。ああこの苦しさから逃れるためにコレを作り続けたのねと感じることはあるわけです。でも内藤さんはそれとはちょっと違う。綺麗ゴトでもない。